

西下げ橋の古刹  
養膳寺物語り

宇都宮伝統文化連絡協議会員 柏村 祐司

下ヶ橋町は、西鬼怒川を挟んで東下ヶ橋と西下ヶ橋の二つの集落からなる。その西下ヶ橋の南端に下ヶ橋公民館や宇都宮市河内農村体験交流館等に囲まれるように地藏堂が建つ。この地藏堂は、明治三二(一八七〇)年に廃寺になるまで西下ヶ橋地内にあった真言宗寺院沼生山地蔵院養膳寺の本尊地藏菩薩を祀ったものである。養膳寺の本堂建物は、廃寺後も存立していたが同三十二(一八七九)年に取り壊され、現在地に移転された。その後、住民協議のもと大正二二(一九三三)年に本尊の地藏菩薩を安置するお堂を新築した。それが今ある地藏堂である。



養膳寺跡に建つ地藏堂

中世の創建とされる養膳寺には、源義経がやつて来たとの伝説がある。江戸時代末期の地誌『下野国誌』に、「さて当寺は寿永の頃源九郎義経主従が、奥州より登る刻、止宿せしと言い伝えたり」と、源頼朝が伊豆において挙兵した折、奥州平泉にいた義経が、兄のもとに馳せ参じる途中に養膳寺に立ち寄りたとする記述がある。義経の養膳寺止宿については、南北朝時代から室町時代初期かけて成立したと考えられる『義経記』にも「狐川うち過ぎてさげ橋の宿について馬を休め」とある。狐川とは喜連川のことであり、さげ橋の宿とは下ヶ橋のことである。

養膳寺に義経が止宿したとの話は、養膳寺が歴史ある寺であることの証である。そしてこの近隣には、中世、鎌倉と奥州とを結ぶ道、「奥大道」が通過した。義経伝説が生まれるロケーションの要素が整っていたのである。ところで地元には、「義経は養膳寺へ泊まった際

に、笈と八角形の笹りんどうの二ツ紋つき鍔物茶釜を遺していった」という話が伝えられる。しかもその茶釜の所在が、昭和三十年頃に話題になったという。義経伝説は、長らく生きていたのである。

さて、養膳寺については、義経伝説とは別に、地藏菩薩への信仰が注目される。この地藏菩薩は、高さ約六〇センチの立像というが、安産子育て信仰で有名な芳賀町延生の地藏菩薩の姉妹といわれる。延生の地藏菩薩同様に安産子育てに霊験あらたかといわれ、近郷近在の善男善女の信仰を集めた。養膳寺の地藏菩薩の縁日は、大正期頃までは、旧一月二十四日と旧十月二十四日を中日とした三日間で、その間、

盛大に地藏会が開かれたという。地藏会は地元の若者組により執り行われ、護摩焚きを依頼した特別な参詣者には祈祷札が授与された。祈祷札は、「お姿」と呼ばれ、地藏菩薩の姿と智積院権僧正頼如の「安産子育ての祈願文」を刻んだ版木を刷ったものである。版木は大小二枚あり、彫刻内容は同じである。大きい版木で刷られたものは掛軸として、小さい方はそのまま参詣者に授与された。この「お姿」を妊産婦が枕元に飾ると安産間違いなしといわれた。なお、この大小二枚の版木は、本県地藏信仰を知る重要な手掛かりになるとして昭和四十七年栃木県指定有形民俗文化財となった。

栄華を誇った養膳寺も、今や地藏堂にその面影を残すのみとなり、安産子育て信仰も衰退した。代わつてその跡地には、前述の通り地藏堂の他に公民館、農村体験交流館が建ち、地元民や農業に生きる若者たちの交流の場所となっている。



地藏菩薩のお姿